

西馬音内盆踊り(羽後町)



新型コロナウイルスの感染対策として、休止を余儀なくされていた夏祭りが、三年ぶりに行われようとしている。いつもの、賑やかで熱く忙しい夏がくるのだ。祭りのない夏は、忘れ物をしたような心もとない気持ちになって日常を過ごす、今年はず準備も早々に行われ、竿燈の観覧席設置の工事も終了して、日が暮れると、練習している笛や太鼓の音が聞こえてくるようになった。

数多く催される夏祭りや行事の中でも「西馬音内盆踊り」の休止は、羽後町の観光と地域の再生活動に大きな影響を与えた。交流人口が少なくなると、人口減少に直面している地域の活力は失われる。秋田の再生活動の主体は高齢者で、数年に

わたるブランクの影響はとても大きいのだ。そんな事態の中で、「舞踏とかやぶき民家」を資源に再生活動をしている羽後町田代では、コロナ対策の影響により国外と県外から訪れる人はなくなつたが、鎌鼬美術館の公開とかやぶき民宿の準備作業などは、とどこおりなく行われている。

毎年開催していた「鎌鼬の里芸術祭」のオープニングは、西馬音内盆踊りの実演であった。旧長谷山邸を背景にした盆踊りは、感慨深い趣があった。羽後町の人たちは、祖霊を敬いお盆の行事を丁重に行う。亡くなった人を偲びながら舞う盆踊りは、供養の行事なのだ。三年ぶりの盆踊りは規制が設けられ、町外から

参加する踊り子を百人に制限して、申し込みを原則にするという。最近の西馬音内盆踊りは観光事業化した側面が見えて、秩序と感染対策を考慮した実行委員会の姿勢は、大いに評価したい。端縫い衣装の氾濫と振りが揃わない傾向は、長期間にわたって写真を撮っていると明確に分かる。会場になつている本町通りでの撮影は、あきらめることにした。

そのように認識していた頃、西馬音内の踊り上手にお願いして、流麗な盆踊りを再現し、撮影したことがあった。地元ゆかりのある人たちが、伝統行事を保存、継承しながら舞い踊る姿は、流麗で美しく誇れる故郷の文化なのだ。